

タイトル	市民参加によるマツ枯れ被害木探索と炭焼き利用	
概要	冷涼地でのマツ枯れ特性を活かした”秋田方式”を導入し、住民参加でマツ林を巡回して防除対象の被害枯死木を判別、伐採し、それを資源として有効活用するために炭やきを行っている。	
管理方法・技術的視点	<p>秋田～天王海岸の砂防林は「夕日の松原」と名付けられる白砂青松の名勝地だったが、20年ほど前からマツクイムシの被害がひどくなってきている。当初害虫の拡散を防ぐため切られた廃木は殺虫剤をまかれて捨てられていた。</p> <p>こうした中で、みどりのマツ林をまもり、貴重な資源をゴミにしないために「炭やきで夕日の松原まもり隊」の活動が始まった。対象のマツ林を1ha程度ごとに区切って分担し、月に一度枯死木探索を行う。その結果から、マツ枯れを伝搬するマツノマダラカミキリの幼虫が入っている枯死木を判別・伐採し、翌年6月それらが成虫となって飛びたつまでに炭にやく。すでに炭やきは10年間120回あまり続けられており、その結果、この付近のマツ林は良好な状態を保っている。</p> <p>市民参加でマツ林を守るという趣旨から一般参加者が取り組める配慮がなされている。たとえば炭焼きを行う窯は天井部分が開閉式になっており一酸化炭素を短時間で放出できるなど工夫がなされている。</p>	
備考	炭窯は(社)国土緑化推進機構の「森の名手・名人100人」に選定された鈴木勝男氏(当会初代会長)の設計。被害木を炭化し資源として有効活用しようとの着想から秋田県立大学との連携で活動が始まった。	
場所・主体	秋田県秋田市 炭やきで夕日の松原まもり隊 (事務局:秋田県立大学森林科学研究室)	
URL等	http://www.akita-pu.ac.jp/bioresource/dbe/forest/sumiyaki.html	
		秋田県立大学炭やき広場。手前に見えるのが伐採されたマツ枯れ被害木